古在由秀氏ロングインタビュー 第1回：高校時代まで

高　橋　慶 太 郎

〈熊本大学大学院自然科学研究科　〒860-8555 熊本市中央区黒髪 2-39-1〉

e-mail: keitaro@sci.kumamoto-u.ac.jp

協力：小久保英一郎（国立天文台），高橋美和

古在由秀氏は太平洋戦争後すぐに天文学者としての道を歩み始め，萩原雄祐氏や畑中武夫氏ら日本の現代天文学を起ち上げた方々の薫陶を受けて，古在機構の発見や人工衛星の軌道の研究など天体力学において第一級の業績を残されました．また東京天文台を現在の国立天文台に改組するにあたって台長として中心的な役割を果たし，東京天文台長を7年，国立天文台長を6年務められました．このように研究においても研究体制の近代化においても大きな活躍をされた古在氏にインタビューする機会を得て，これまでの2年間で8回のインタビューを行いました．研究のことだけでなく研究者にいたるまでの道，研究者を取り巻く環境や社会情勢など，さまざまなトピックについて興味深いお話をしていただきましたので，今号から4回にわたってそのダイジェスト版を連載いたします．第1回目は少年時代から高校時代までです．

古在由秀氏略歴

1928　東京に生まれる
1951　東京大学理学部天文学科卒業
1962　「古在機構」に関する論文発表
1966　東京大学東京天文台教授就任
1981　東京天文台長就任
1988　国立天文台長就任
1994　国立天文台長退任
2009　文化功労者に選ばれる

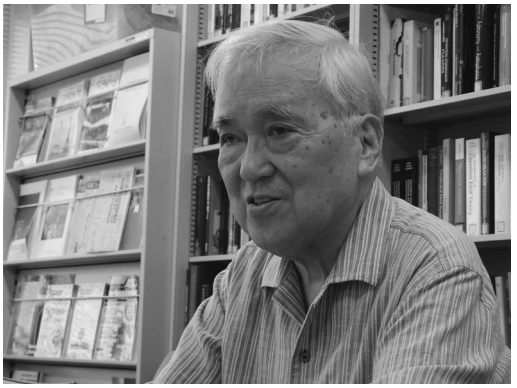

写真1　古在氏近影（2014年8月．撮影：吉田二美氏）．

●少年時代

高橋：インタビューをお引き受けいただきどうもありがとうございます．ではお生まれの頃からお話しいただいてもよろしいですか．

古在：僕は東京府，巣鴨のお地蔵様のそばで生まれた．それで僕は仰高東小学校に入ったんだけど夏休み過ぎて小石川区に移って，小石川区駕籠町小学校に行った．その近くに理研があって当時，化学教室か何かが毎年一回必ず火事を出してて．

僕らの頃は小学校の尋常科*1) だけが義務教育

*1) 旧制小学校は6年間の尋常科と2年間の高等科からなっており，前者だけが義務教育であった．

で，その後は義務じゃないんですね．あの頃少し景気が良くなったんだけど，僕らの学校でも中学校に行く人がだいたい半分をちょっと切るくらいだった．小学校に尋常科6年，高等科2年というのがあったんですが，高等科に行った人がかなり多いんですよ．

それで僕らの頃の中学校の入学試験というのは激烈だったらしいんだよね．それで僕らの駕籠町小学校にはすごいはりきった先生がいてね．その人が僕らより2年上の生徒を猛特訓して，府立五中，今の小石川高校だね，あれに12，3人入れちゃったんですよ．

高橋：五中というのは名門なんですか？

古在：いい学校だったですね．特に理科系が強い学校で．数学の小平邦彦先生とか久保亮五さんとかが五中出身ですよね．それがいろいろ問題になったらしくて，僕らの年から中学校の入学試験が内申重視になったんですよ．学科試験がなくなったの．それでね，僕は恥ずかしながら内申が悪いんですよ．それで府立五中を受けようと思ってたんだけど先生から「お前の成績じゃ五中には入れない」ってお達しを受けてね．どうしようかなあって思って困っていたら，ちょうどその頃中学に入りたい人が増えたんだね，府立の中学校がずいぶん増設されてきたんですよ．それで府立十四中ができることになって，「お前もあそこくらいだったら受かるかもしれない」って言われて．

高橋：新しいところだからと．

古在：ええ，それでそこを受けて入ったんです．だから第一回生なんですよ．

高橋：成績があまり良くなかったということですが，その頃はあまり勉強が好きではなかったんですか？

古在：そうですね．僕はね，なんかね，要するに雑な人なんだね，今もそうだけど．字はまずいしね，先生にいつも怒られてて，「お前は算術は割にできるんだけど字が下手で，計算なんかそれで間違えるんだ」って．

高橋：じゃあ得意だったのは算術？

古在：いやあそうでもなかったけどね．まあ最後の頃は割と得意で．このごろ文科省の嫌いな難問奇問が出るといい成績が取れたんですよ．だけどやさしい問題だとよく間違えるんでね．たぶんそういうこともあって成績も悪かったんだと思うし，あんまり競争心がなかったんだよね．

高橋：親の教育方針はあったんですか？

古在：それがね，うちの母はね，うちのなかで小学校やなんかで一番できた人なんです．あれはもしかしたら教育ママになりそうな人だったんだけど，うちの父が長男でその両親が病身でその看護をやらされてたんだよね．かわいそうに．それで忙しくて僕らの教育にまで手が回らなかったんだよ（笑）．

高橋：じゃあ放っておかれて育ったと．

古在：そうですね．それで中学校に入るとき「なんか俺よりちょっとできの悪そうなやつがもっといい学校に入って俺は十四中か」と思って，それでやっぱり少し勉強しなきゃいけないと思って中学になったときに試験勉強もちゃんとするようになったんですよ（笑）．

高橋：では小学校の頃は遊びが中心で．

古在：はい．あの頃は小石川っていうところも空地がやたらにあってね．それで学校が終わるころにみんなで相談して「今日はどこの空き地に集まろうや」って言って．その約束を聞きに行くために学校に行くようなもんだった（笑）．休み時間になるとだいたい一番早く出たやつが校庭で丸を書く場所だけを確保してみんなで相撲をとって．それから放課後はね，野球の三角ベースですよ．その空き地に行って．

高橋：小学校の頃は何か興味を持ったこととかありましたか？

古在：いや，それがなかったんですよ，なんか知らないけど．

高橋：何か本を読んだりは？

古在：実はちゃんとした本をあまり読まなかったけど，僕の母方の祖母がね，もう男の子と言えば力仕事をやらせるものだと思っている人で，なんかあると僕を寄こせっていうんですよね．それで行くと，なんか力仕事でどっからどこまで物を運ぶとか言われて．それで一回だけ帰りに本屋に立ち寄って，「本を一冊買え」って言われたことがあって．昔，山本一清さんという，花山天文台なんかを作ったり東亜天文学会なんかもこしらえた有名な人がいたんです．どうしてなのか知らないけど僕はその人の天文学の初歩みたいな本を買った覚えがあるんですよ．

今でも覚えているけどね，「太陽，地球，月が一線に並ぶと満月だ」って書いてあるわけですよ．それでしばらく後のほうに行くと「太陽，地球，月が並ぶと月食になる」って書いてあるんですよ（笑）．理屈がわかってれば月食は満月の日に起こるんだっていうのがわかるんだけど，そのときは一方では満月になるって書いてあり，一方では月食になると書いてあって「これはインチキだ」と思ったね（笑）．

高橋：では子どものころから天文に興味があったんですね．

古在：だと思うんですけどね．ただ僕は考えてみりゃ，もうずっと小学校後半から親父が病気だったし，そういうほかのことは一切やらなかったんですよ．だから天文少年だったり科学少年だったりした時代ってのはないんですよ．

それでまあ中学に入ったんだけど，府立十四中は石神井中学になって，最初仮校舎か何かで理科室はなかったと思うんだ．石神井に移ってからは理科室はあったけども物資がない頃で理科の実験道具なんかなかったから「僕はちゃんとした理科教育は受けてないんだ」っていつも言ってるわけ（笑）．

高橋：好きな科目はあったんですか？

古在：まあだからね，僕は考えてみりゃあね，中学校で初めて習った学科が得意だった，小学校から尾を引いている奴はダメだったんですよ（笑）．

高橋：じゃあ英語とか….

古在：英語とかね，それから漢文なんていうのは得意だったよね．それから物理もね．でも物理なんかちゃんと実験やってくれなかったんですよね．

●戦争の影響

高橋：戦争が始まるのは中学の頃でしょうか．

古在：僕が中学校入ったのは昭和15年です．昭和16年の12月に太平洋戦争が始まったんですね．どうも朝早くからニュースでやっていたらしいんだけど，僕のうちにはラジオがひとつ親父のところにしかなくて，僕はラジオを聞かないで学校に行っちゃったんですよ．そして学校に行ったらね，なんかアメリカ・イギリスと戦争始めたって言うからね，これは大変なことになったなと思ったけども，僕らにはどうしようもないからって….

高橋：生活に戦争の影響はありましたか？

古在：いろいろ影響はありましたね．うちの父親に弟がいて，ちょっと年が離れてたけど戦前から左翼に入っていて，戦争が始まったころから2回治安維持法で検挙されたんですよ（笑）．だから僕はなんとなしにね，いわば国賊の家に生まれたようなね（笑）．

高橋：検挙は思想的なものでですか？

古在：そうですね．だからうちの叔父はあのころ留置場に長いこと入れられて，詐欺犯に「あんたと私は同じ知能犯だ」って言われてがっかりしたって言ってた（笑）．それで結局うちの叔父も何かいろいろ考え直すとかいうことで，執行猶予がついて昭和18年か19年くらいに出てきたんだな．戦後もがんばってやったんだけど，最後は結局共産党を除籍されたんだとか言ってたよ．

でね，うちの親父は昭和10年から病気になって，丸10年寝てて昭和20年，戦争が終わる直前に死にました．父親が早く病気になったもんで，なんか困ったことがあったらあのおじさんに相談

に行けってうちの母親が言うわけ．ところがね，すぐいなくなっちゃうんだよ．いなくなっちゃうっていうのは捕まって（笑）．

それからですね，初めのうちから勤労動員*2)みたいなのをやらされてたんだけど，昭和19年いっぱいは陸軍第一造兵廠っていう陸軍の工場に動員されて．普通の工員よりはちょっと待遇がいいんですね．普通の工員の人は拘束12時間，で僕らは1時間免除されて拘束11時間．それで昼夜2交代．2週間昼間があると2週間夜というのをやっていて．僕はね，今言うとだれも信用してくれないんだけど，旋盤工を13カ月やったんですよ．洋服油だらけになってやってました．

高橋：それは中学の頃ですか？

古在：中学の終わりの頃ですね．それでね，僕ら旋盤工やってて初めの頃はね，「フ号作戦」って書いてあるの．僕は流れの作業でなしに一回一回設計図もらってやってたんですよ．それで「フ号作戦」ってあれは風船爆弾の部品だって言われて．そのうちにね，「ケ号作戦」って書いてあったんですよ．丸ケ．それは決戦兵器だって．噂によると赤外線を目当てにした誘導弾だって．でもあれは全く成功しなかったような気がしたね．「お前がやったからだ」っていう人もいるけど（笑）．

高橋：お父様が長い間病気で寝ているとき家計はどうなっていたんですか？

古在：うちの親父は鉄道省の電気技師だったんですよ．それで転轍機と信号機を結び付ける仕事をしたらしいですよね．昔はね，公務員，あの頃は官吏って言ってたけど，なんか資格を得て18年勤めると，昔の言葉で恩給っていうのがついたんだよね．

高橋：年金みたいなものですね．

古在：ええ，やっとそれに該当したらしくて．戦争中まではそういうのがあったんだね．それから退職金もずいぶんもらったみたいだな．だから初めの頃はそんなに悪くなかったんですよ．

高橋：そうだったんですね．中学での軍事教練はどうでしたか？

古在：軍事教練はもちろんありました．ただ僕らの学校はね，わりによかったんですよね．怖い先生がいなくてね．まあなんか富士山の下の軍の宿舎に一晩泊まりで行かされたり．夜中に起こされて夜襲の練習だとか言われたりね．

それからね，2年のときに太平洋戦争が始まってたんだけど，3年生になって，一兵卒から始まって大尉になってシンガポールまで行ったっていう教練の先生が来ました．教官の中にもね，配属将校と学校で雇った教練の先生っていうのがいてね．配属将校っていうのは軍隊から派遣された現役の人．それで学校で雇った教練の先生の中にそのシンガポールまで行ったっていう人が来てね．模範を示すって言ってなんかやるとね，映画を見てるみたいで面白くて僕ら見たんですよ．

高橋：その頃はやっぱり兵隊さんはかっこいいとかあったんですか？

古在：僕自身について言うとですね，さっきも言いましたようにうちの叔父が治安維持法にかかってる人なんでね，まあ軍隊の学校に行ってもまず受かるはずがないと思っていたんですよ（笑）．それにね，僕らは陸軍第一造兵廠でもうこき使われてほんとに嫌な思いしかしなかったですよ．入るときとか出るときとか並んで出入りしなきゃいけないし，なんかいわば鉄条網の中で働いててね．大学に入るころに，工学部なんていうのは造兵廠を思い出してね，嫌だなと思った（笑）．

高橋：中学の最後のほうはもう全然学校に行かずに働いたんですか？

古在：学校に行かず，それから夜あそこで空襲にあったりなんかして，わりにひどい目に合って．

高橋：東京大空襲のときはどうされてたんです

*2) 1938年より学生は数日単位での勤労奉仕（軍需産業・農業など）を義務づけられていたが，1943年以降労働力不足が深刻になり，長期にわたる動員が行われるようになった．

か？

古在：大空襲のときはね，3月10日のとき僕は工場は昼間勤務で，夜はうちにいたんです．池袋の奥のほうに住んでいてあの辺は空襲の地域外でしたが，B29が飛んでくるのは見えました．それであくる日，池袋の駅行ったらなんかみんな焼けた布団の下で目を腫らせたような人がいてね，これはすごいなと思って．それから5月27日のときは造兵廠が焼けたんですよね．それでうちの親父が6月になって死んで．

高橋：それは大変でしたね．お父様からはこういう人になれとかそういうお話はあったんですか？

古在：いや，僕はね，父親とまともに話したことないんですよ．

高橋：あ，そうなんですか．

古在：うちの父親は脳溢血でね，かなり精神的にもおかしかったし，その前もうちの父親は子どもと一緒に飯を食うなんてことはしなかった人なんだよ．それでよく父親が子どもの教育に参加しないと変な子が育つって話が新聞に出てて，「だから俺も変なんだ」って言ってたんだけどね（笑）．でも世の中にはね，そういう人がずいぶんいるんだよね．ノーベル賞の小林さんも父親が早く死んだ人だね．それから西島和彦さんもそうだよね．

●一高時代

高橋：高校は旧制一高ですね．

古在：一高受かったんですけどね，なんか僕らは中学を3月に卒業って言われたんだけど4・5・6月は工場で働けって言われてね．そのまま働いたの．

高橋：昭和20年入学ですからもう戦争の末期の頃ですよね．

古在：末期の頃．それでね，一高の入学式が7月になったんだな．そしたら安倍能成って有名な校長がいてあの人が「今の日本では，正しいものがあまりにも弱すぎる．君たちは先輩のしでかしたことの尻拭いをしなければならない．」って平気で言うんだよね．

高橋：それはまだ終戦の前ですよね？

古在：うん，僕は「あれ，あんなこと言っていいのかな？」って思ってさ（笑）．で，配属将校ね，軍から来てる，あれ大佐くらいの偉い人ですよ．あの人どういう顔しているのかと思って見たら，居眠りしてるような顔してたよね．後になって「知らなかった」って言うんだろうけど．あれはね，衝撃的だったですよ．僕らの中学校もそれほど軍人になれとかいう先生はいなかったけれども，あんなこと言ったら大変だったと思うな．

高橋：やっぱり高校はそういう自由な雰囲気で．

古在：一高はわりにそうだったんですね．他の高等学校では，高等学校も軍人の養成のためにあるんだみたいなこという校長も多かったけど，一高だけはそれを言わない．それから一高の寮ね，あれは貧乏人のためにはいい学校だってみんな言ってましたよ．

高橋：その頃は全寮制ですか？

古在：全寮制です．それで，変なこと言い出すと，一高の頃からの知り合いで，後藤昌次郎っていう男がいたんですよね．彼は面白い男でね，戦争中は文科に入ってたんですよ．「文科こそ国を救うものだ」と言って入ったんだけど，ダメだって言うんで戦後一回退学して理科を受け直して入って．それで理科に入ったら3つ4つ年下の男にね，なんかえらい数学できるやつがいて「これはダメだ」と思ったんだって（笑）．それで結局法学部入って，それで弁護士になってね．冤罪を専門にやってたんですよ．

高橋：先生は理科に入ったんですね．

古在：僕は理科．僕らの頃はね，理科が圧倒的に定員多いんですよ．兵隊に取られないようにと言って本来は文科に行く人も理科に来たから．

高橋：文科のほうは徴兵されるわけですね．大学に入ってすぐに終戦ですね．終戦の頃はどちらに？

古在：それがね，これも不思議なことでね．入っ

てしばらくしたらなんかまた1年生は勤労動員だって言うんですよ．僕らは山形県の鮎貝ってところに行ってね，「そのうち一高はそこに疎開するから，お前たちはその前にあそこに行って食料を用意しとけ」って言われて．それでなんと劇的にね，8月14日の晩に僕ら先発隊で上野駅発って行ったんですよ．でも汽車が遅れて遅れて．宇都宮から向こうの坂がですね，ものすごく人が乗ってるもんだから汽車が登れなくて．しかもB29が上飛んでてね．何回も登り損ねてやり直して，ものすごく遅れてやっと昼ちょっと前に赤湯っていう駅に着いた．そこから支線に乗り換えて鮎貝に行くんですけど，ちょうどそこで12時で天皇の放送があるっていうんでそこで聞くことになって．あれは戦争負ける話だっていう説と，天皇が出てきてもっとがんばれって言うんだという説と両方あったんだよね．でも僕らはもう3月10日の東京の空襲のときからして，あれでまだ戦争するのかよと思ったくらい悲惨な状態だったですよね．それで駅前で待ってたらね，わりに高級の陸軍将校が従卒をしたがえてやってきてね．こんな人が隣に来たら困るな，サーベル振り回されたら困るなと思ってたけど（笑），放送が終わったら「残念」って言って向こう行って．ただ僕らも放送がよく聞こえなかったんだよね，あれ（笑）．

それでさらに変なことを言うとね，それから鮎貝に行く汽車に乗り換えたらね，僕の前に明らかに招集された兵隊さんが座っていてね．それでその人が僕にね，「放送聞きましたか」って小さい声で言うわけ．「聞きましたよ．」「どうでしたか？」「負けですよ．」って言ったらね，その人喜んじゃってね（笑）．

高橋：今から行くという人だったんですね．

古在：だからね，もうこれで家に帰れると思ったんだろうね．それで弁当半分僕にくれた（笑）．あの頃の弁当っていうのは貴重なものだからね．そういう思い出がありますよね．

高橋：で，終戦でその後すぐに東京に戻ったんですか？

古在：それからね，僕らはまたくそ真面目な人がそろってたからね．15日に着いたんだけどね，今東京に戻るべきかどうかっていうので大議論を始めたんだよね（笑）．今東京戻ってもしょうがない，ここでがんばろうって話があって．それで，9月の末になるまでがんばってたんだよね．そうしたら校長から帰れと言うお達しがきたというんで，帰ったんですよ（笑）．

高橋：帰ってからは普通に授業があったんですか？

古在：ええ，そうなんですよ．ただ僕ね，帰ってしばらくしたらジフテリアにかかって1カ月入院したんでね．それでまあ僕は石神井中学から一高に来たんだけど，府立一中のやつらなんかは数学の宿題なんかやってこいって言われるとみんなやってくるでしょ．俺なんかできない問題ばっかりで．今年はもう落第かななんて思ったからね（笑）．

高橋：授業はどんな感じだったんですか？

古在：僕の二つ上の年では高等学校は2年間ですよね．僕らも初めは2年の約束で入ったんですけど途中で3年になった．ともかく初めは2年のつもりでね．微分積分なんて工場に行ってたときに自分で教科書で一生懸命勉強してたけど，1年で微分積分なんかやらないうちにもう力学をやらされたりひどかったです．

ついでに言うと，小柴（昌俊）君が僕らと同学年なんですよ．

高橋：あ，そうなんですか．

古在：隣の組だったんですよ．隣の組っていうのはね，なんかの授業だと一緒になったりして．彼はね，どうも1年どっか明治の専門学校に入ったんだね．それで僕らは7月に入ったんだけど，彼はもうちゃんと4月から来ててね．なんかあの人偉そうな顔してるじゃない，いつも（笑）．偉そうな顔してあれは上級生か落第生か．あの頃ね，落第してきたやつは偉い人だと思ってて，彼を偉

い人だとずっと思ってたんだよね．僕らの上の組も僕らの組もみんな勤労動員やなんかばっかりやってたもんで，自分から判断して落第するやつがいたんだよね（笑）．

高橋：それはもっとちゃんと勉強したいということですか．

古在：しなきゃいけないって．僕なんかもね，そう思ったことがあるんだけども，親父もいないし早く卒業しなきゃいけないと思って．

高橋：そういう一番勉強するときに働かされたわけですね．

古在：それでね，僕らが入ったらさ，「今年の新入生みたいにできの悪い奴はいない」なんて先生が悪態つくしさ（笑）．

高橋：でもしょうがないわけですよね．

古在：しょうがないわけだね．

高橋：じゃあ高校の授業はきびしかったですか？

古在：いや，なんかね，僕は高校くらいまではね，勤労動員中にこそこそ勉強したからよかったんですよ．それで数学の試験受けに行ったら僕はできたんだよ．「今日の問題易しかったんじゃないか」って言ったらなんか嫌な顔された（笑）．

高橋：じゃあ数学がお得意で？

古在：高等学校の成績は小学校よりはいいですよ（笑）．

高橋：戦争が終わってからは授業をちゃんとしてたわけですか．

古在：いやそれがね，やっぱりあの頃は生活実態調査やると一高とか東大とかいうのが生活費が一番少ない学校だったんですよ．僕らの学年でもね，戦争中はまだそこそこ食えてたけど，戦後ものすごいインフレだったでしょ？　だから金がなくなっちゃった人もいたしね．それから，外地から来たのがいた．僕のよく知っている男が満州の撫順から来ていて，弟が3人もいるから家族が引き揚げてきたらすぐ困るだろうって，みんな腹が減ってるのに彼は食糧溜めてたよね．僕らも一生懸命アルバイトで家庭教師してたけど．だから朝早くから授業やって午後はわりにフリーにしてたと思うんですよね．その撫順から来た男なんかは，そんなだけじゃ十分じゃなくて，当時占領中に手紙の検閲っていうのがあったって言うでしょ？彼は中央郵便局であれやってててね．それでほとんどフルタイムでやってて学校に行ったら「休学してくれ」って言われて休学したんだけど，寮にはいていいって言われて寮から通ってたんだ（笑）．

高橋：食事は寮で出るんですか？

古在：食事は寮で出るんだけど，ただあの頃はお米も配給で，それから一汁あれば一菜なし，一菜あれば一汁なしっていう食事だったからね（笑）．だからもう食事済んだ後すぐお腹空いてた，僕なんか．だから僕の友達でも駒場の寮を見ると腹が減るって（笑）．

高橋：食料はいつくらいから厳しくなったんですか？

古在：いやあ，あのね，もう戦争中から厳しかったですよ．それから戦争が終わっても．僕が大学入ったのは昭和23年ですけれども，23年くらいからやっとね，麺類，お蕎麦やなんかが外食券使わないで食べられるようになったね．お米の配給が一日2合3勺だったんだよね．それで，一番最初の総選挙のときに「自分が議員になったらお米の配給を2合5勺にする」とかね（笑）．前にその話したらね，「古在さん，お米2合3勺も食べてたんですか」って言われちゃってさ（笑）．いまどきお米2合3勺も食べてる人はいないよ，一日に．でも当時はおかずなんか全くないんだからね．

高橋：当時家庭教師を雇うような家っていうのは多かったんですか？

古在：要するに，僕らのそばには貧乏人しかいないけど，金持ちの家ってのはあったはずですよ．今でも覚えているけど寮に月に600円くらい払うんで．で，800円稼いでたんだ，僕ね．奨学金ももらってたかな．するとあとはほとんどなくて．大学を受けに行く頃もさ，あの頃ね，受験料100

円したんだよ．だからいくつも受けられないんですよ（笑）．

●大学入試

古在：それでね，僕より2年上の学年は2年間しか高等学校にいなくてしかも勤労動員が多かったんで，あの年は大学を受けるのに入学試験はなくてね．割り振ったんだよね．それで一高から名古屋の物理に行った人がわりにいてね．それでそういう人がやってきて，「お前，いまどき東大の天文に行くんだって？　あんなとこ行って何になるんだ．勉強したいんだったら名古屋に来い．」とかね（笑）．

高橋：名古屋は当時勢いがあったんですか？

古在：勢いがあった．坂田先生かなんかおられたりね．それから僕の母方の祖父がまだ生きてて，これは古い三高の卒業生で大阪の府内にいたんだけど彼も「いまどき東大なんか行ってもしょうがない」って言うんですよ（笑）．「勉強したいんだったら京大行って湯川先生のところで勉強しろ」なんて言われてね．ただね，なんかもう汽車賃出すのも大変だしね（笑）．

高橋：それで東大ということですか．

古在：それで実は一高に田中正夫先生っていう数学の変わった先生がいて，東大天文の萩原（雄祐）先生と同級だったらしくてね．萩原先生がその頃，なんか戦争中に書いて出版できなかった本を出したんですよ．「天体力学の基礎（上）」[1] っていうのを．でね，その田中先生が「あれはいい本だから君たち読みたまえ」なんて言ったもんでね．たまたま本屋で見つけて思い切って買ったんです．高い本だった．200円くらいしたんだ．それでやっぱりこういうのがいいかなと思ったり．

それである日，東大本郷に行って時間割見て回った．そしたらね，工学部とか医学部は朝8時から5時まで学校にいなきゃいけないようになってるんだよね．で，これはだめだと思ったね．それから理学部はね，午後はわりにゆるやかで．演習っていうのがあって，僕らいたときは南部さんがまだ助手で，演習担当で難しい問題出してた（笑）．それで天文を見たらね，その萩原先生の特別講義っていうのがあってね，「希薄天体の量子物理学」とか「三体問題の位相数学」とかね，他の学科にはないような，「なんとか概論」とは違ったものが並んでるだよね．これ聞くだけでもいいやと思って，受けるって言い出したんですよ．そしたらなんかうちの母は親戚に「お前んとこは金に困っているっていうのに子どもを天文なんかに入れちゃっていいのか」ってだいぶ言われたらしいんだけど（笑）．

高橋：じゃあ先生はその萩原先生の本を読んで，講義科目も面白そうだというので東大の天文を受けようと．

古在：そうなんですよ．ただね，読んでって言ってもね，正直言ってあれ難しくてわかんなかったんですよ．

高橋：大学レベルの専門書ですよね？

古在：うん，天体力学，要するに古典力学．あとから考えりゃね，あれがあの頃わかってりゃ大学行く必要なかったんだ（笑）．しかもね，大学レベルと言っても今の言葉では大学院レベルだよね．で，だいぶ後の話になりますけど，僕はアメリカ行くときね，その本だけ持って歩いてた．そしたらアメリカ人でそういうのが好きな男にね，「タイトルとチャプターだけ訳せ」って言われてそれだけ訳して．そしたらね，「お前この本訳せ」って言い出してね（笑）．それで萩原先生に言ったら「それじゃ俺が自分で英語に訳す」だって．結局ね，1巻だけ日本語で出てたんだけど，英語で5巻にして出したんですよ[2),3)]．

高橋：じゃあそれがきっかけで英語版が出版になったんですね．

古在：萩原先生っていうのは助教授から数えて30年以上教えてたんだろうと思うんだけど，「おれの講義がわかるやつが2人か3人いればいい」なんてうそぶいてたんだ．いまどきあんなこと

言ったら大変だよね（笑）．

高橋：じゃあ相当難しい講義をされたわけですね．では話は戻りますが，大学入試はどうでしたか？

古在：僕はね，天文は入るのがわりに易しいと思ったんだよ，正直言って．戦前はわりに無試験だったことがあったり．それから第1志望物理，第2志望天文で入って来た人も多かった．ところがね，昔は東大っていうのは高等学校卒業生しか受けさせなかったんだけど，戦後になって軍の学校とか専門学校とかから受け入れだして．それから，高等学校の理科の定員がたくさんあったけど，物理なんかがたぶんあの頃定員を減らしたんじゃないかな．それで，天文の僕の1年上の組がね，8倍かなんかの競争率だったんですよ（笑）．あれは萩原先生がいばってててね．要するにあの年は入学者の最低点で天文のほうが物理より上だったんだって言って（笑）．

高橋：じゃ物理より難しくなってた．

古在：だったと．あの年だけだったと思うんだけどね．僕らのときもね，5倍くらいいたんだよね．それで一部屋で25人くらいいて，「この中から入るのは5人か」と思うとがっかりして（笑）．

しかもね，変なことを言い出すとですね，天文受けようかって決めて12月ぐらいに受験勉強しないといけないかなと思いだしてた．で，寮の隣の部屋に小林英司君っていう映画の助監督になるっていうやつがいてね．一高記念祭っていうんで，「シュヴェイクの冒険」って第一次世界大戦のときの反戦小説の芝居をやろうっていう話があったんですよ．主人公が少し遅れたやつでね，小林君が「ああいうアホウの役ができるのはお前だけだ」って言うんだよ（笑）．それでそれに乗っちゃってさ，2月1日までやっちゃったんだよ．

写真2　一高記念祭での演劇「シュヴェイクの冒険」にて．古在氏は前列左から2番目．

高橋：それでも東大に入れたわけですね．

●終戦について

高橋：じゃあ大学の話に行く前にちょっと終戦のあたりの話に戻しますけど，終戦後の占領中っていうのはどんな感じだったんですか？

古在：ああ，僕らには直接の影響はなかったですよ．例えばさっきの大学入学試験のときに軍の学校からも受けられたっていうことを言いましたけど，軍の学校から入る学生の数をある割合以下にしろとかそういうお達しは出てたって話ですけど，僕らは全く関係ない．

高橋：街では占領軍は見かけましたか？

古在：それはやたらいましたよ．

高橋：どういう雰囲気でしたか？

古在：それはね，例えばね，銀座4丁目のあそこの交差点にはね，MPっていうミリタリーポリスがいて，それが交通整理やってたんだ．で，あの身振り手振りがさ，日本人とすごく違って．それから日本人はさ，戦後もう栄養失調みたいな体してるのに，アメリカ人はみんなお尻なんかぷりぷりしててさ（笑）．こりゃ負けるよなと思って見てた（笑）．

高橋：戦争が終わって率直に，どんな印象をお持ちでしたか？

古在：僕らより下の人はね，わりあい軍事色豊かな教育を受けたって言うけど，僕らも多少あったのかもしれないけど，あんまり影響受けてない．特に高等学校に入る頃は，全く関係なかったしね．

高橋：天皇陛下についてはどういう印象をお持ちでしたか？

古在：天皇陛下はね，なんかね，天皇について言われると…．また違う話題から入っていきますとね，ぼくの叔父は天皇と同じ年でね，生まれた日も2週間くらいしか違わないんですよ．それでなんかね，うちの叔父はかなり天皇に敵愾心を持ってたようなね（笑）．だけど僕らとしては，あれはやっぱし，戦争が終わったときにうまく日本がおさまったのはあの人がいたせいじゃないかと思うし，まあ軍国主義的じゃないといいながら，やっぱし僕らは戦争の最後の頃に死んだ兵隊さんに対しては，特に学徒動員なんかで行った人は別に侵略のために行ったわけじゃないし，敗戦がわかってて行った人ですからね．あの人たちががんばったんで，日本は占領されなくて済んで，僕らの命が長らえたっていう気はしてますよね．

高橋：原爆のことはいつお知りになったんですか？

古在：原爆はね，要するに新型爆弾が落ちたって聞いて．それからなんかああいうのが来そうになったときは白いシーツをかぶってろって言われたですよ．

高橋：爆弾が来たらってことですか？

古在：放射線を防ぐためだろうね．反射するような．それから僕もアメリカ行った後で，名前は忘れちゃったけどMITの先生で，マンハッタン計画に直接関与したって人に会ったんですよ．それで彼が「日本人は原爆のことどう思っているのか」って言うから「ものすごく恨んでるよ」って言ったらね，「そういう返事をしたのは日本人でお前だけだ」って言って．日本人はね，やっぱりね，そういう失礼なこと言っちゃいけないと思ったんじゃないかな（笑）．

それから，アメリカの天文学者でも，やっぱし原爆はあれ以上の犠牲を少なくするために落としたんだということを主張する人がいたけれど，僕らから言わせりゃもうね，あの頃完全に日本には軍事力なかったんですよ．

高橋：もう負けそうだっていう感じはありましたか？

古在：もう負けそうだってことは明らかです．直接的にはさっき言った東京大空襲の後，あれを見てこれでもまだ戦争するのかと僕ら思ったね．

高橋：戦争が終わってだいぶ解放されたような感じはありましたか？

古在：まあ解放されたって言ってもね，個人としてはね，父親もいなくなって生活に心配があったし，戦争終わってバンザイっていうわけじゃなかったんだ．戦争が終わんなきゃもっと悪かったかもしれないけど．

高橋：食糧難もあって．

古在：食糧難，それに僕には妹や弟もいたし，母もいたし，自分だけの食い扶持稼ぐだけじゃ済まなかったから．だから学校もずいぶん休んだよ．天文の僕の同級生に言わせると「古在は学校に来なかった」って言うような（笑）．

●旧制高校の文化

高橋：旧制高校って結構独特な文化があったんですよね．例えば寮歌とか．

古在：そうだよね，僕らの同じ学年で朽津耕三っていう化学の先生がいて，あれが寮歌をよく覚えてて．

高橋：寮歌はいつ歌うんですか？

古在：いや，いつも歌ってるんだよ（笑）．この頃だってさ，なんか集まると最後に寮歌歌おうなんて言うやつがいて，おれはくたびれたからもうやめようやって言うんだけどさ（笑）．

高橋：「嗚呼玉杯に花うけて」っていう有名なのがありますよね．あれも普段から歌うんですか．

古在：あれはあんまりね，歌わないんだよ．畏れ多いんだよ（笑）．

高橋：格が高いわけですか？

古在：と思うね．昔の言葉でコンパやるときはそういうの歌ってたよね．

高橋：コンパってどういうものですか？

古在：コンパって言うのはね，僕らの頃はね，食料もないしそれからもちろんお酒もないからね．要するに何だか下らない話をずいぶんしたんだよね．

高橋：夜中まで騒いで？

古在：いや僕はね，割に早く寝た人なんだよね（笑）．部屋ごとにやったよね．ただ，1年に何回かね，全部寮ごとに晩餐会っていうのがあって，校長やなんかも出て来てね．

高橋：戦後，すぐ旧制高校はなくなっちゃいますよね．

古在：そうですね，僕らは終わりから3番目．

安倍能成っていう校長がいてその人が戦後すぐに文部大臣になって．その後に来たのが天野貞祐って人で，あの人がだいぶ一高をつぶすのを止めようとがんばったんだけどダメで，それで校長を辞任しちゃったんだよね．だけど一高の教授に心ある人たちがいて，教養学部っていうのがあったのが東大だけなんだよね．他の大学はみな教養部でしょ？　しかもその中に教養学科っていうのを作ったのは，一高の先生が努力した成果なんですね．

高橋：ああいうものはやっぱり必要だと．旧制高校はそういう教養を身につけるところだったんですか？

古在：教養を身につけるっていうよりね，僕なんかが天文を勉強するのにはやっぱり語学が必要だったでしょ？　あれは結局語学の学校ですよね．本質的には．

小久保：英語ですか？

古在：僕らは天文やるためにドイツ語とフランス語を．ドイツ語は学校でやったけどフランス語は自分でやった．ポアンカレの本なんか読んだんですよ．

小久保：フランス語でポアンカレを読んだんですか？

古在：ええ，大学のときに．

参考文献

1）萩原雄祐，1947，『天体力学の基礎1上』．

2）Hagihara Yusuke,（1970）*Celestial mechanics: Dynamical principles and transformation theory*（Vol. 1），（1972）*Celestial mechanics: Perturbation theory*（Vol. 2, Parts 1 and 2）. Cambridge: MIT Press.

3）Hagihara Yusuke,（1975）*Celestial mechanics: Differential equations in celestial mechanics*（Vol. 3, Parts 1 and 2）.（1976）*Celestial mechanics: Periodic and quasi-periodic solutions*（Vol. 4, Parts 1 and 2）.（1977）*Celestial mechanics: Topology of the three-body problem*（Vol. 5, Parts 1 and 2）. Tokyo: Japan Society for the Promotion of Science.

A Long Interview with Prof. Yoshihide KOZAI [1]

Keitaro Takahashi

Graduate School of Science and Technology, Kumamoto University, 2–39–1 Kurokami, Kumamoto 860–8555, Japan

Abstract: Prof. Yoshihide Kozai started his career as an astronomer just after the second World War, under the guidance of the first-generation modern Japanese astronomers such as Yusuke Hagihara and Takeo Hatanaka. He made considerable achievements in celestial mechanics and also made a substantial contribution to Japanese astronomy as a Director-General of Tokyo Astronomical Observatory and National Astronomical Observatory of Japan. In this article, we report a digest of our interview on not only his research but also his life and social environment concerned with Japanese astronomy.